

■近況レポート

コロナ・ショックで金・銀相場も急波乱

金は一気に六千円台に上昇

二〇一九年の金相場は堅調な展開で、税込小売価格は五、〇〇〇円前後の価格帯から年末に五、八〇〇円台、今年に入って一気に六、〇〇〇円台に乗せ、一時は六、五〇〇円付近まで噴き上げた。二月末から三月にかけては、世界同時株安の中で金銀相場とも波乱含みな展開を見せている。

■国内金相場が四〇年ぶりの高値

まず「【一】一九七三年以来の内外金・銀相場と為替相場」のグラフを見て頂きたい。ここ一年程の動きは別のグラフで見ると、ここでは長期グラフで大雑把な動きをおさらいしてみたい。海外金相場は二〇〇一年を安値に上昇に転じ、二〇一一年に一、八九六ドル台の史

上最高値を付けた。一〇年間で約七倍の値上がりとなった。その後二〇一五年には一、〇五〇ドル付近まで下げたが、二〇一九年には再び騰勢を強め、今年二月には一、六〇〇ドル台にまで上昇した。一方国内金価格は一九八〇年一月に瞬間的に六、四九五円の史上最高値を記録している。この時の海外金相場は八五〇ドルであったが、一ドル二二〇円台の時代であったためである。この瞬間高値はかなり遠い存在のものであったが、年平均価格で見ると、二〇一三年以降はほぼこの水準を捉えていたということが出来る。国内金価格のグラフは継続性を持たせるため税別価格をデータに作成してあるが、実際の売買価格は消費税が上乗せされており、一九八九年四月の消費税導入以来

の税込価格はグラフより高くなっている。それは現在では一〇％であり、今年一～二月の平均価格は税別で五、五九五円、税込では六、一五四円となる。最近の国内価格は四〇年ぶりの高値圏にあるが、実質的にはこの価格に並んだと言ってもよさそうである。

■銀相場は精彩欠く展開続く

ドル建ての銀相場は、アフガニスタンや中東の政情不安の中ハント一族の投機で、一九八〇年に五〇ドルまで噴き上げた。その後五ドル付近まで下落した後、二〇一一年にかけて再び大相場となった。ここ六年程は、一五ドルから二〇ドルの動きが続いている。国内相場も一九八〇年と二〇一

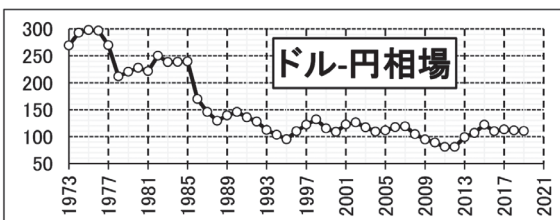
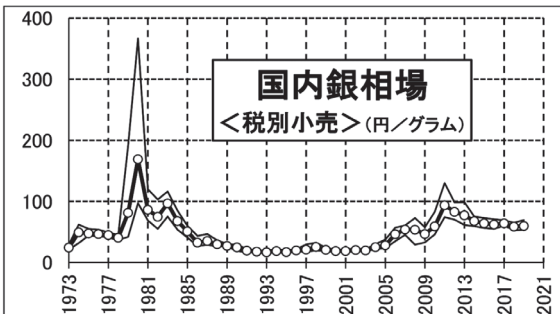
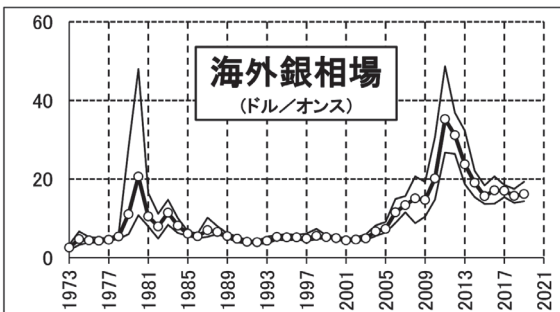
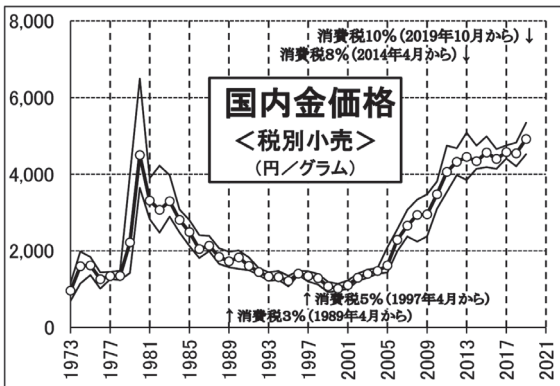
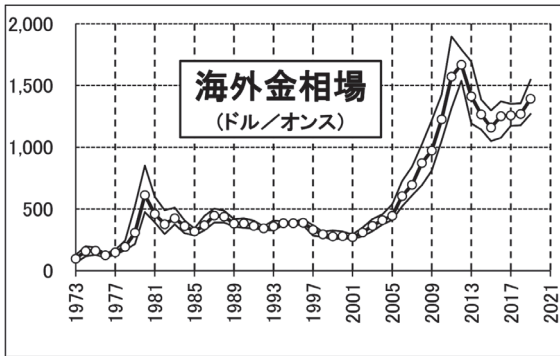
年に山があるが、金相場に比べるとその弱さが目立っている。

ドル建て相場で今年一～二月の平均値と一九七三年の平均値を比べてみると、金が一、五七九ドルと九七ドルで一六倍になっているのに対し、銀は一七・九四ドルと二・五六ドルで七倍にとどまっている。

■二〇一九年の金相場は六月以降堅調

二〇一九年の海外金相場は一、二八〇ドル台でスタート、一月下旬に一、三〇〇ドルを回復し二月中旬に一、三四〇ドル台に乗せ二〇一八年四月以来の高値を記録した。三月に一、三〇〇ドルを割ったものの五月まで一、三〇〇ドルを挟みでの動きが見られた。米国の金利引き下げ観測から六月には急伸、六月下旬から七月は一、四〇〇ドル台がらみの展開。七月末には米国の政策金利が一〇年ぶりに引き下げられたこともあり八月上旬には一、四八〇ドル台と二〇一三年四月以来六年四ヶ月ぶりの高値を記録した。九月からは米中貿易競争の悪化を材料に上伸、一、五五〇ドルを突破す

【1】1973年以降の内外金・銀相場と為替相場 年間高低値と平均価格(O) ※2020年は2月末現在



る戻り高値を更新した。その後は一、五〇〇ドル付近の動きが主流で、一月に一、五〇〇ドル割れ、その後は一、四五〇ドルをサポートラインに小ジツカリした動きを見せ、一二月下旬には一、五〇〇ドル回復した。昨年一二月以降の内外金・銀相場の動きは、別のグラフで後述することにした。

二〇一九年初めからの国内金・銀価格の推移をグラフ【2】に示したが、こちらは売買価格とも税込価格で表示した。金相場は六月からほぼ一貫して右肩上がりの展開、グラフ内に破線で上昇トレンドラインを示してみた。この帯の中を上下しながら上昇していったことがわかる。上側の線がレジスタント（抵抗）ライン、下側の線がサポート（支持）ライン、ほぼこの帯中での動きとなっている。二〇一九年六月以降の上昇トレンドは三ヶ月で三五〇円程上昇する角度であり、これが長期的に続いていくことは考えられない。銀価格のグラフでは、値動きが荒いこともあって綺麗なトレンドラインにはなっていない。

■二〇一九年の日米株価は上昇したが…

金・銀相場のことを書いているのに、何で株価の話？ と違和感もあると思われるが、二〇一九年一月からの日米株価指数グラフを掲載してみた。NYダウは昨年史上最高値更新が続いた。米国経済の堅調を背景とした株高で、トランプ大統領もご満悦の様子。連れて二〇一九年の日経平均価格も、一万九千円台から二万四千円乗せと堅調な一年であった。

金相場と株式相場は、その動きが相反すると言われたこともあった。「安全資産の金」というフレーズがある。戦争や政情不安、経済・通貨危機などでは、金もてはやされることが多い。世の中が安定し、経済情勢が良ければ株は高く、金は弱いというのが一般的だ。数十年単位で見えた場合、株価と金相場が逆行する場面も見られたこともある。また、短期的にもこのような傾向が見られることもある。例えば好景気を示す経済指標が出された時などは、株高・金安にな